

平成30年度あきた型学校評価シート

(秋田県立聴覚支援学校)

評価領域

学習指導・教育課程

重点目標	日本語力、学力の向上を目指し、質の高い教育活動を推進する。	P
現 状	<ol style="list-style-type: none"> 1 幼稚部を修了した時点で地域の小学校を選択する傾向が強く、小学部への入学者は減少傾向にある。中学部・高等部については、県内各地の小学校や中学校を卒業し入学してくる生徒がいるが、その理由や教育的ニーズは様々である。 2 聴覚障害に他の障害を併せ有する幼児児童生徒の割合が増加しており、一人一人の障害の状態や発達段階に応じた教育課程の編成が求められている。 	
具体的な目標	<ol style="list-style-type: none"> 1 小学部・中学部の教科指導において、学年対応率90%以上を目指す。 2 他の障害を併せ有する児童生徒や高等部専攻科の教育課程を見直し適切に設定する。 	
目標達成のための方策	<ol style="list-style-type: none"> 1 自立活動の専門性と教科指導力を向上させ、主体的な学びを引き出す授業づくりを行う。 2 小・中・高等学校等との授業研究交流を通して、授業力の向上を図る。 3 各教科における指導内容を適切に精選し、学部全体を見据えた年間指導計画を作成する。 4 定期的な話し合い・評価により教育課程の見直しを行い、高等部専攻科についてはリーフレットを作成する。 	
具体的な取組状況	<ol style="list-style-type: none"> 1 全教員が相互に授業を見合う場や他校の授業を参観する場を設定し、授業改善に取り組んだ。学部ごとの自立活動学習会等を実施し、障害特性に合わせた配慮（自立活動的配慮）を日々の授業づくりに生かすことができた。 2 学部ごとや教育課程委員会等で話し合いを重ね、教育課程を見直すことができた。 	
達成状況	<ol style="list-style-type: none"> 1 小・中学部の主要教科において、当該学年の教科書を使って授業を行っている児童生徒は88.9%であった（知的障害を併せ有する者を除く）。 2 高等部専攻科の教育課程を見直し、リーフレットを作成した。 	

自己評価	(評価) B	(根拠) 1 主体的な学びの姿は見られたが、「具体的な目標」に掲げた「教科指導の学年対応率90%以上」を超えることはできなかった。 2 言語聴覚士の資格を有する教員や専門性の高い教員を活用し、言語力や発達面を評価し、指導計画や実践に反映させることができた。 3 教職員の学校評価で、「日本語の力や基礎学力が向上するよう努めている」の評価が高かった。 4 教育課程について改善を図り、次年度の目標や教育内容の見直しにつながった。	C
------	-----------	---	---

↑ 評価基準
↓

A : 具体的な活動がなされ目標を達成できた
B : 具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C : 具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者 評価と意見	(評価) B	(意見) 「聴覚障害の専門性を維持・向上してほしい。」「地域の人的資源を活用してほしい。」という意見が出された。	C
----------------	-----------	---	---

自己評価及び 学校関係者評価に基づいた 改善策	<ol style="list-style-type: none"> 1 指導力の向上を図り、探究型の授業づくりに努める。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 新学習指導要領に基づく教科等の指導力の向上 (2) 日常の指導における自立活動的配慮の徹底 (3) 他校や先進的な取組の情報収集 (4) 手話に関する研修や他校の授業参観 2 高等部専攻科のリーフレット等を活用し、地域や関係機関に向けて本校の魅力を積極的に発信する。 3 研修等の工夫により、障害特性や併せ有する障害についての理解を深める。 	A
-------------------------------	---	---